

内科医 つれづれ草

高山浩一

20

早いもので連載も今回で最後になりました。読者の皆さまには、私の拙い内容のエッセーを読んでいただき感謝しております。私が医師としてこれまで経験してきたこと、感じたことを、特に専門としている肺がんの医療に焦点を当てて執筆してきました。何かしらお役に立てることがあったのであれば幸いです。

気が付けば、私が医師になって既に30年以上たちました。医

古い診療記録

学の世界は奥が深く、いまだに分からないことばかりです。「少年老いや早く学成りがたし」の心境です。一方で、医学は一生を懸ける意義のある学問であるとも感じています。次代の医療を担う若い人々には、目標に向かってまい進していただきたいと願っています。

私が30年余りの年月をどのよう過ごしたか振り返ると、呼吸器内科医として肺がんだけでなく、肺炎やぜんそくなどさまざまな呼吸器病を診てきました。患者さんを診察してカルテを書き、薬を処方したり検査をしたり、人並みに

医療の原点どこに？

診療に従事してきたと思います。臨床データをまとめて学会で発表したこともあり、論文もいくつか書いてきました。



イラスト・山本重也

大学院生として研究をしていた時期もありますし、さらに研究を続けたくて、2年間ほど米国に留学もしていました。

さまざまな経験が医師としての人格や思考を形成してきたと思います。いつ肺がんを専門にしようと考えたのか、今となっては判然としません。

私は時々、訳もなく研修医の時に受け持った患者さんの診療記録を読み返したくなることがあります。30年前の遅れた医療が、手書きの稚拙な文章で記載されているのを見るのは、正直言って汗顔の至りです。

古い記録を読むと、その当時の様子が患者さんの表情や話し声と共に、私の脳裏に鮮やかによみがえります。それはなぜか、がんの患者さんであることが多

いのです。

当時の抗がん剤の効果は乏しく、受け持った肺がんの患者さんの多くは、残念ながらお亡くなりになりました。しかし、その闘病の記録はカルテだけではなく、私の心の中にもしっかりと残っています。

長い年月を経ても風化しない記憶は、自覚する、しないにかかわらず、当時私が最も関心を持っていたことに違いありません。私が進むべき道を、実は患者さんが教えてくれたのだと古い記録から改めて気付かされます。

患者さんの声に耳を傾ける。医療の原点がそこにあるように思えます。

(京都府立医科大学教授) 〓おわり